

P-A-13) 人工血管を用いて被包術を行った dorsal ICA aneurysm の 1 例

渡辺 孝男・佐藤 清貴 (米沢市立病院 脳神経外科)

破裂 dorsal internal carotid artery aneurysm (ICA AN) は術中破裂の危険が高く, small AN の場合は clipping が難しいと考えられている. 我々は人工血管を利用し, 被包術を行い, 術後の血管写にて動脈瘤の消失を認めた 1 症例を経験したので報告する.

〈症例〉30才男性. 〈既往歴〉特記すべきもの無し. 〈現病歴〉1993年4月27日, 頭痛発作にて発症. 翌日, CT にてクモ膜下出血が確認された. 同日の血管写で 1.5 mm 大の dorsal ICA AN が認められ, 同年4月30日の血管写再検にて 2.5 mm 大と増大したため手術を行った. blister-like AN が疑われ, まず筋肉片とベリプラストにて被包し, 更に直径 6 mm の PTFE vascular graft (IMPRA 社, Type FLEX) を用い被包を行った. 術後経過は良好で, 4ヶ月後の血管写再検では AN は消失していた.

P-A-14) 頸部内頸動脈解離の 1 例

太田原康成・田口 壮一 (岩手医科大学 脳神経外科)
三浦 一之・小川 彰 (同 脳神経外科)
山崎 公也・東儀 英夫 (同 神経内科)

頸部内頸動脈解離は, 近年になって報告が散見されるようになってきたが, 欧米に比較するとその頻度はまだ少ない.

症例は46歳女性. 外傷の既往無く頸部痛にて発症した. 脳血管撮影にて左内頸動脈分岐部の 2 cm 末梢から頭蓋底部にまで至る string sign を認め, MRI にては狭小化した内腔を取り囲む T1, T2 にて high intensity area を認め, 頸部内頸動脈解離と診断した. 発症時の SPECT にて, 患側大脳半球の広範な flow reduction を認めた. 症状の頻発・脳循環の低下を認めたため, STA-MCA anastomosis を施行し, 独歩退院した.

頸部内頸動脈解離においては, 1~3週間て自然緩解することが多い一方で, 重篤な神経脱落症状を残す症例もあるため, 自然経過を考慮した上で, 適切な治療法を, 時期を逸せずを選択することが重要である.

P-A-15) 後下小脳動脈に発生した解離性動脈瘤の 1 例

石川 修一・金木 慎哉 (帯広第一病院 脳神経外科)
朴 永俊・菅野 三信 (同 脳神経外科)

頭蓋内に発生する解離性動脈瘤は最近報告例が増えているが, 主として, 内頸動脈・中大動脈・椎骨動脈などの主幹動脈に生じ, 分枝動脈に発生することは極めて希で, 数例の報告を見るに過ぎない. 今回, 我々は, 後下小脳動脈に発生した解離性動脈瘤の 1 例を経験したので, 文献的考察を加えて報告する.

症例は, 59才女性. 主訴は, 頭痛, 軽度の意識障害で, 平成6年2月11日, 当科入院となった. 入院所見は, 軽度の意識障害, 著明な頂部硬直で, Hunt&Kosnik Grade 3 であった. 患者は平成2年4月16日にもクモ膜下出血を起しており, この時は, 中大動脈瘤が見つかり Clipping を施行している. しかし, 今回の出血でも前回と同様に, CT 上, 右小脳橋角槽に強い高吸収域を認めた. そのため前回の血管写と比較, 検討してみると, 右後小脳動脈の Cranial loop に形態の変化している, 解離性動脈瘤と思われる所見が認められた.

P-A-16) 血栓化の過程で親動脈の閉塞をきたした中大脳動脈瘤の 1 例

小笠原邦昭・沼上 佳寛 (石巻赤十字病院 脳神経外科)
関 薫・北原 正和 (同 脳神経外科)

脳動脈瘤の内腔自然閉塞は希ならず認められるが, その親動脈の閉塞をもきたした例は極めて希である. 今回我々は動脈瘤の血栓化の過程で親動脈の閉塞をきたした右中大脳動脈瘤の 1 例を経験したので報告する. 症例は77才の男性でめまいの精査にて MRI を施行したところ large type の右中大動脈瘤が発見された. 年齢を考慮し保存療法とした. その10カ月後突然の左片麻痺をきたし発症3時間後に当科を受診した. 受診時の CT では異常所見は認められなかった. 左片麻痺は入院後急速に改善し発症6時間後には完全に消失した. 発症24時間後の CT では右中大脳動脈瘤は high dense と変化していた. 発症48時間後突然左完全片麻痺となった. CT では右中大脳動脈瘤の血栓化の進行と共にいわゆる MCA dense sign を認めた. 脳血管撮影では右中大脳動脈が内頸動脈から分岐した直後で閉塞していた. その後も右中大脳動脈瘤の血栓化は進行して行き, 7日目の CT では均一な高吸収域を示した. 本症例では TIA をきたした時点においてすでに動脈瘤の血栓化が起り始めてお